



子どもを変えるのは子ども

8月×日

長い長い2日間が終わろうとしている。それにしても、眠くてしかたがない。なにしろヤツら、昨日の夜はいくら言っても寝てくれないし、今朝は今朝でえらい早起きだし。まあ、いっぱいしゃべりたいのはわかるけどね。

いよいよ今年の交流会の最後のプログラム。さすがに100人の外国人生徒が並ぶと壮観だなあ。今年はどんなアピールをしてくれるんだろう。

* * *

毎年8月、全国在日外国人教育研究協議会主催の研究大会にあわせて、全国在日外国人生徒交流会（以下、交流会と略）が開催されます。今年は8月6日～7日に鈴鹿で開催されました。交流会のしめくくりは、研究大会に参加している大人たちへのアピールです。日本の学校や社会のなかで呻吟している子どもたちの生の声は、わたしたちにたくさんのこと気づかせてくれます。

わたしがこの交流会にはじめてかかわったのは、1993年のことでした。当時の参加者はほとんどが在日韓国・朝鮮人。参加者も30人ぐらいの交流会でした。それがいまや、韓国・朝鮮人はもちろん、中国人・ブラジル人・フィリピン人など、さまざまなルーツをもつ生徒が参加するようになりました。また、人数も100人を超す大きな交流会になりました。でも、一人ひとりの子どもたちにとって、交流会のもつ意味は、昔も今もなんら変わるものではありません。

今年は京都からKさんが参加してくれました。

Kさんは、2年前に中国から来日し、滋賀県の中学2年生に編入しました。当時Kさんはまったく日本語ができない状態で、校内の日本語教室に通いながら、徐々に日本語を習得していきました。翌年、Kさんは滋賀県の公立高校を受験しました。ところが結果は不合格。その原因を、日本語教室担当のHさんは「問題の内容はわかっているけど、設問が理解できないから」と言われました。

最近、新渡日の生徒のための特別入試制度をもっている地方自治体が徐々に増えてきました。しかし、滋賀県にはそうした制度がなかったのです。

そんなKさんは、ご両親の仕事の関係で、今年、京都に引っ越してきました。たまたまHさんの知り合いだった京都の中学校教員Tさんから、わたしはKさんを紹介されました。はじめて出会ったKさんの印象をひとことで言うなら「いい子だなあ」でした。会話はほとんど中国語です。日本語しかしゃべれないわたしとの会話は、ゆっくりとかみくだいてしゃべるか、Kさんを連れてきてくれたHさんを通してしか成立しませんでした。

わたしたちはKさんに「高校に行こうね」と何度も言いました。しかし、一度高校入試に失敗したKさんは、高校進学へのモチベーションがずいぶんと低下しているようでした。それもそのはず。2年前の渡日にもかかわらず、すぐの引っ越し。中学時代の友だちとも別れ別れです。日常は家がやっている中華料理屋の手伝い。それ以外の時間はネットで中国語のサイトを見るだけです。

わたしたちは、そんなKさんに高校生・大学生の中国人と会わせたいと思い、交流会に誘いました。はじめは「家の用事がある」「病院に行かなくちゃ」と、なんとなく渋っていたKさんでしたが、なんとか参加してくれました。

交流会が終わって、Kさんに「どうだった？」と聞くと、「楽しかった！」と最高の笑顔が返ってきました。中国人の高校生と思いつきり中国語でしゃべり、班別討論では「高校に行きます」と宣言したと、同じ班の生徒から聞きました。

ともすればわたしたち教員は、「なんとか子どもをを変えたい」と願います。でも、こんな出来事に出会うと、子どもを変えるのは子どもなんだ、つくづく思い知らされます。今年の高校入試まで、あと半年。Kさんに入試を突破する学力につけるという次の仕事が、教員であるわたしたちを待っています。

（高校教員 土肥いつき）